

Charana!

09
2025

アフリカに学ぶA

～2025 年度夏期実践型プログラム～

About Ghana



Pickup! プロフィール

正式名称：ガーナ共和国 (Republic of Ghana)
首都：アクラ (Accra)
面積：238,537 km² (日本の約3分の2)
人口：約3,400万人 (2025年推計)
言語：英語 (公用語) + アカン語・エヴェ語など70以上
宗教：キリスト教70%、イスラム教20%、伝統宗教少数
通貨：セディ (GHS)
地理：西アフリカ、大西洋に面する
主産業：カカオ (世界第2位)、金、石油
気候：熱帯性 (雨季：4月～10月／乾季：11月～3月)
時差：日本 -9時間



ガーナといえば！

- 「アフリカの優等生」と呼ばれるほど政治的に安定
- チョコレートの原料であるカカオの大国
- 日本人にとっては野口英世ゆかりの地

Challenge! ガーナの歴史大解剖!!



ヨーロッパ人との接触と植民地化

1471年 ポルトガル人が現ガーナ地域に到来。金貿易を開始
1482年 エルミナ城建設 (奴隷貿易・金貿易の拠点)
16～18世紀 オランダ、イギリス、デンマークなども進出し、大西洋奴隷貿易が拡大
19世紀初頭 奴隷貿易廃止 (1807年英国議会)。その後は金・カカオなどの「資源植民地化」が進む
1874年 イギリスが「ゴールドコースト植民地」を正式に設立
1884-85年 ベルリン会議でアフリカ分割確定

独立運動と国家形成

1920年代 教育を受けたエリート層や労働者運動が台頭
1947年 汎アフリカ主義者クワメ・エンクルマが政治活動開始
1957年 ガーナ、サハラ以南アフリカ初の独立国家として誕生 (初代大統領：クワメ・エンクルマ)
「ゴールドコースト」から「ガーナ共和国」へ改称
1963年 アフリカ統一機構 (OAU、現アフリカ連合) 設立に尽力
1966年 軍事クーデターによりエンクルマ失脚

政治的不安定期

1972年・1979年・1981年 度重なる軍事クーデター。民政と軍政が交代
1981～1992年 ジェリー・ローリングス政権。経済改革 (構造調整) を実施。
1992年 新憲法制定、複数政党制・民政移管へ

現代 (1990年代～)

2000年以降 選挙を通じた平和的政権交代が定着 (西アフリカで民主主義の模範とされる)
2007年 沖合で石油発見、経済成長が加速
2010年代 経済発展と同時に教育・雇用・環境問題が深刻化

日程表

Day 1

The Scoop! 施設紹介・講義内容

Orientation/Campus Tour

ガーナ大学は1963年に設立され、レゴン・アクラ・コロレブの3つのキャンパスがあります。メインキャンパスであるレゴンの広大な敷地には国立大学病院も併設されており、地域住民も自由に大学の敷地に入出入りすることが可能です。

Lecture on African History & Politics

主にガーナにおける歴史や現代政治について学びました。講義では植民地時代から独立運動、政治体制の変遷、現在の民主主義や今後の政治展開について理解を深めました。

Comtemporary Ghanaian Politics

歴史の講義を踏まえて、さらにガーナの民主主義の発展や政治体制の特徴について理解を深めました。また、ガーナの古くから続く首長制と現代の大統領制がどのように共存（対立）し、国家政治に影響を与えているのか詳しく学びました。



Schedule

Orientation/ Campus Tour



Lecture on African History & Politics



Comtemporary Ghanaian Politics



Market



Real Talk... 感想

ガーナ初日、想像以上に国が発展していることを肌で感じました。中でも印象的だったのは医療制度です。ガーナには日本の皆保険制度に近い仕組みがあり、国民は医療費を全額負担する必要がありません。これは、政府にそれを支える税金があり、医療へのアクセスが確保されているということです。正直、ガーナを含むアフリカ諸国には医療制度が未整備で、限られた人しか利用できないというイメージを持っていましたが、自分がステレオタイプにとらわれていたことに気づかされました…



P.S. まるでひとつの街！大学内で何でもそろそろ快適空間

ガーナ大学のレゴンキャンパスは、東京ドーム約244個分の広～い敷地！中には国立病院やスタジアム、市場、スーパー、銀行、ジム、教会、モスクまであって、学生生活に必要なものが全部そろってる。コンビニがないから、一人暮らしの寮生活にはすごく助かるよね。キャンパスは広すぎて、学科ごとに建物がバラバラだからみんな車やバスで移動してる。もちろん、私たちもキャンパスツアーでバスに乗って回りました(*^▽^*)

Day 2

3

2025
September

The Scoop!

施設紹介・講義内容

Practical Dance Lessons: この講義では、実際に身体を使ってガーナの伝統音楽に触れ合いました。講義前半では全員でダンスをし、後半にはみんなで輪になって太鼓を叩きました。ガーナの伝統文化を肌で感じると同時に、笑顔が溢れる楽しい時間でした！

Twi Language Lessons: この講義では、ガーナ南部から中部でアカン族の主要言語として話されるチュイ語について学びました。簡単な文章を学び、この日以降、ガーナで出会った人に現地語で挨拶や感謝を伝えることができるようになりました！

The Kwame Nkrumah Memorial Park and Mausoleum: ガーナを独立に導いた初代大統領エンクルマを記念して設立された霊廟と記念公園です。広い公園の中には野生のクジャクがいました。



Centre for Arts and Culture: 数百の出店から成る政府直轄のマーケットで、美術品や小物等の土産が多数売られています。明らかな観光客の私たちはバスから降りた瞬間囲まれる勢いの客引きにあいましたが、お店の人は皆親切で優しい人たちでした。基本的に売り物に値札は付いておらず、値段交渉の中で最終的な売値が決定します。

Real Talk... 感想

エンクルマ記念公園では、ガーナのこれからを担ったエンクルマについて理解を深められました。展示されている列強国首脳からの贈り物や周辺国首脳との会合の様子からは、独立当初のガーナをプライドを持って国際舞台に導いていったエンクルマの姿が伺えました。展示は派手ではありませんが、エンクルマのスピーチ文章をそのまま記録した展示からは、彼が如何に優秀な指導者であったかがよくわかります。アートセンターでは印象的な出来事がありました。買い物を終えバスに乗ろうとした際、アクセサリーを売る男性に話しかけられましたが、あいにく時間が迫っており、「もう帰らないといけないんだ」と伝えました。それでも彼は、嫌な顔一つせず了解し、最後には「ガーナへようこそ！」と付け加えてくれました。商売相手にならないとわかっていても歓迎してくれるガーナ人の素晴らしいホスピタリティを感じました。

Schedule

Practical Dance Lessons



Twi Language Lessons



The Kwame Nkrumah Memorial Park and Mausoleum



Centre for Arts and Culture



P.S. 捕捉したいこと（おもしろニュース・やらかしエピソード）

英仏を代表とする欧州諸国からの植民地支配の影響を受けるアフリカでは、フットボールが大人気！特に強豪国であるガーナの人々はフットボールが大好きで、街中では色々なユニフォームを着ている人を見かけました。各地のお土産屋さんではガーナ代表チームのユニフォームが売られており、私も1枚、現在のガーナ代表を引っ張るモハメド・クドゥスのユニフォームをアートセンターで購入しました。値は少し張りましたが、後悔はありません！宝物にします！！



Day 3

The Scoop!

施設紹介・講義内容

Lecture on Ghanaian Economy: この講義では、独立後から現代にかけてのガーナの経済の歴史を学び、また様々な課題についても紹介されました。

W.E.B. DuBois Centre: ここは、「パン＝アフリカニズムの父」と呼ばれるW.E.B.デュボイスの記念館です。記念品や当時の書斎が展示されていました。

Catholic Institute of Business & Technology: 上智大学と協定を結んでいるガーナ、アクラの大学です。



Schedule

Lecture on Ghanaian Economy



W.E.B. DuBois Centre



Catholic Institute of Business & Technology



Accra Mall

Real Talk... 感想

この日の講義は、難しかった一方で、とても印象に残り、ガーナの経済の問題の複雑さを実感させられました。

特に印象的だった内容はインフォーマルセクターでした。元々このトピックに関しては漠然とした知識しかなく、最初にガーナの街並みを見たときは、頭に商品の入ったかごを載せて歩く人々の光景はとても新鮮なものでした。しかし、インフォーマルセクターではスキルが身につかずフォーマルセクターとは差が生まれてしまう点や政府からの保護を受けられないという点などを学び、少し見え方が変わりました。



P.S. 捕捉したいこと（おもしろニュース・やらかしエピソード）

私たちは Catholic Institute of Business & Technologyを訪れましたが、学生は一人もおらず、出会った先生と集合写真を撮り帰りました。夕食まで時間が余ったため、始めて Accra Mallに行つて少しだけ探索しお土産を買うことができました！

Day 4

5

2025
September

The Scoop!

施設紹介・講義内容

Visit JICA Office: 午前中はJICAのガーナ事務所に訪問しました。ガーナ国内での多様な分野にわたる活動を教えていただきました。学生からの疑問や考えに対して親身にお答えくださり、予定の時間を超える濃い時間だったと感じています！

Lunch: ガーナ料理のレストランに行きました。ここで初めてオクラスープやフフに挑戦することができました。みんなでテーブルを囲みながら現地の伝統料理に触れることのできた至福の時間でした！



Osu Castle: デンマーク＝ノルウェーによって1660年代に砦が建設され、後にポルトガルやイギリスの支配下となり奴隷貿易の拠点として使われていました。建設当初は金などの取引拠点でした。オス城は初代大統領エンクルマをはじめとして第4代大統領までガーナの政庁として使われていたそうです。

Reflection: 刺激的な日々で浮かんだ疑問や思いをそれぞれぶつけより考えを深めるとても充実した時間でした！

Real Talk... 感想

"No return" 怖いほど美しいオス城

午後はオス城に行きました。ガーナに来て初めて奴隷の監獄を見ました。外観のきれいさとは裏腹に、内部の血生臭さや暗くどんよりした雰囲気、ガイドさんの思いのこもった説明に言葉が出ませんでした。特にかつての奴隷と同じように収容から船へ向かうまでの道順をたどったことで、より忘れられない体験となりました。"So they are" 小さな船の模型ときれいなオーシャンビュー、そして白く輝きを放つ城。確かにこの場所で多くの人が非人道的扱いによって命を落とし、大陸へと渡った。残酷な歴史と近距離で対面できたことで、人間の恐ろしさや現代に残る差別、経済・政治的格差といった深い傷跡や権利の大切さを強く感じました。目の前の光景を受け止めようとして頭がパンクしそうと学生が振り返っていたことがとても印象的でした。



P.S. 捕捉したいこと（おもしろニュース・やらかしエピソード）

今日のお昼はJICAガーナ事務所で働く方のおすすめするレストランへ行きました。とてもおしゃれな店内で現地の料理が堪能できるということでもっと楽しみにしていました。ですが、現地の辛いものを信用していなかった私は結局アボカドと蒸し鶏のサラダを食べました。みんなはオクラスープやフフに挑戦しており、とてもガーナを感じるひと時でした。料理が運ばれてくるまで長い間待機することが多く、この日は注文してから食べ終わるまでに3時間ほどかかってしまいました。(笑) またガーナの人たちの衛生に関する姿勢は日本より強いように感じており、手を洗うためのきれいな蛇口があり、手を使って食べるアフリカらしさの表れ？のようなものを体感しました！

Schedule

VISIT JICA OFFICE



LUNCH

OSU CASTLE



REFLECTION

Day 5

6

2025
September

The Scoop!

施設紹介・講義内容

エルミナ城は1482年にポルトガル人によって交易拠点として建設されました。1979年にはユネスコ世界遺産に登録されています。当初は、金や象牙の交易が行われていましたが、やがて大西洋奴隷貿易の最大級の拠点へとその役割が変化していきました。16世紀以降、新大陸アメリカで資源を獲得しヨーロッパに送るといった動きが活発になりました。大西洋奴隷貿易ではこの三角貿易の一角として、アフリカの人々がアメリカに「輸出」され、プランテーションや鉱山の現場で強制労働を強いられました。内には奴隷を収容していた地下牢があり、男女分けられて存在していました。地下牢は非常に暗く、衛生環境も悪いです。しかし、奴隷の人々はこの中で自分がアメリカへ輸送されるのを待たなければなりません。女性の奴隷は、収容中ヨーロッパの商人にレイプされることもあったといわれています。当時の残酷さは計り知れません。



Schedule

Travel to Cape Coast



Elmina Castle



Lunch



Local Market



Real Talk... 感想

この日は、私たちが滞在していた首都アクラから離れ、ガーナの歴史を学ぶために重要な地であるケープコーストに向かいました。片道約6時間の道のりでみんな眠そうでしたが、ドライバーさんはノンストップで運転してくれました。本当に感謝です🙏最初にケープコースト城に訪問予定だったのですが、この日ケープコーストの地域のお祭りがあり、各地から人々が集まっていたようで、ケープコースト城につながる道がすべて閉鎖されており、断念しました。すごい賑わいでとても驚きました。エルミナ城では、実際に奴隷の人々が収容されていた牢獄の中に入るといった体験をし、その暗さに恐怖を覚えました。一方で、城の屋上あたりから見える景色は大西洋が広がりきれいだったことが非常に虚しく思いました。当時の残酷さを完全に理解することは不可能ですが、それでもこのような事実があったということを知らないことは怖いなど改めて学ぶこと、そしてそれを伝えることの重要性を実感しました。

P.S. 捕捉したいこと（おもしろニュース・やらかしエピソード）

この日のランチはエルミナのレストラン🍴各々ピザやポルガライスなどを食べていましたが、ほかの参加者がフルーツジュースを頼むとなんと1ℓくらいのバックジュースが出てきました😲そして100セディ日本円にして1200円ほどの完全に観光客価格を提示されさすがの響もまいってました😲これも貴重な経験ですね🌟

Day 6

7

2025
September

The Scoop!

施設紹介・講義内容

Coconut Grove Beach Resort に一泊し、ケープコースト周辺で活動をしている3名の協力隊の方にお話を聞きました。3名とも学校教育に携わっておられ、活動紹介の後にたくさん質問に答えていただきました。

環境教育やお金の稼ぎ方の一つとして、子どもたちと道でペットボトルや袋を集めて業者に売り、その収入を学校の収入の一つにするという活動や、ガーナは物を新しくつくるのではなく直す文化であること、インクルーシブ教育の実状など、協力隊の方の生の声を聞くことができました。

Cape Coast Castle：大西洋奴隷貿易の拠点になった城の一つで、世界遺産に登録されています。



Schedule

meeting
with JICA
volunteers



lunch with
JICA
volunteers



Cape
Coast
Castle



Return to
Accra



Real Talk... 感想

普段はマーケットでお買い物をされているというお話やガーナでのゴミ捨て事情など、今回訪れたケープコーストで活動中の協力隊の方々だからこそ伺うことができる、ガーナでの生活のリアルに触れることができました。さらに、質疑応答の時間やランチの時間にそれぞれの方のキャリアや考え方を伺う中でこれまで漠然としていた「協力隊として活動する」ということがだんだんと想像することができるようになりました。

大西洋奴隷貿易の拠点となっていたケープコースト城を訪れたことで、「歴史」というものをあらためて考えるようになりました。未だ問いという形で明確なものにはなっていませんが、まずは知ること、そこから自分が何を考えるか、未来にどのようにつながっていけるかが重要であると感じました。

P.S.

6日目から発熱してしまい大変な中でのプログラムでしたが、薬だけではなく日本から持参した非常食のアルファ米、スポーツドリンクの粉末、梅干し、のど飴がとても役に立ちました。渡航前の体調管理はもちろん、飛行機やバスでの乾燥対策や快適に過ごすためのグッズをさらに研究したいと思っています。

Day 7

The Scoop!

施設紹介・講義内容

毎回のReflectionを通して、たくさんの学びを振り返ると同時に、同じ体験をしたはずの仲間が異なる点を印象に感じていること、異なる受け取り方をしていることを知ることができ、学びを整理するとても良い機会になりました。

ランチを食べたら最後の課外活動であるNational museumへ。Scheduleコーナーの写真は木の繊維を使って衣類を作っていたガーナの先人たちの知恵を展示されたもの。実際に触れることができる展示はガーナでは多く見られ、とても印象的でした。



日の締めくくりは学生たちお楽しみのアクラモールでのショッピング！ガーナはチョコレート、コーヒー、布、ビーズアクセサリー、シアバターなど有名なものが多く、日本にいる友達や家族へのお土産に思い思いの品を購入することができました。

Real Talk... 感想

体調不良者続出？！

7日目はケープコーストからアクラまで片道5時間の車移動があり、お腹の不調や発熱などを起こす学生もいました。

見知らぬ環境の中、体調管理のために多くの学生が梅肉エキスや漢方薬などを持参し事なきを得ました。



何ヶ月も前から楽しみにしていた渡航型プログラムをみのり多いものにするためには何より当人の体調管理が重要です！参加を検討されているみなさんも準備は万全に！！

Schedule

Reflection

National
museum

Accra Mall



Dinner

P.S. 捕捉したいこと（おもしろニュース・やらかしエピソード）

現金を使う機会はアクラモールが最後だったため、みんな必死に現地のお金を使い切ろうと爆買い、、、。事前にたくさんお金を使ってしまった学生はお金が余っている学生と帰国後に日本円で返金する約束をしたりと、みなさんお金の使い方には個性が出ていました。いくら換金するかは事前に前年度の学生のレポートを確認したり、高価な買い物をする予定があるかを考えたりする必要がありそうです。

Day 8

9

2025
September

The Scoop!

施設紹介・講義内容

今日がガーナ研修最終日。
私たちがこれまで見てきたガーナの姿から得た学びや疑問について再び振り返ることで、ガーナ研修を締め括った。

最後には、ガーナで学んだことについての証明書をガーナ大からサプライズでいただくなんてことも。

安全に、空港まで辿り着き、何ら問題もなくゲートを通り、ここでガーナをさることへの実感がようやく湧きはじめた。他の学生たちも同じ様子であった。

あっという間にドバイ空港に辿り着き、いざ東京に帰るぞとゲートに向かおうとした時、まさかのハプニングが起こった。学生一人が、パスポートを飛行機内においてきてしまったのである。のちに無事にパスポートは見つかった。



Schedule

final reflection



Real Talk... 感想

このガーナ研修10日間、本当にあっという間に過ぎてしまった。この思いがまず最初に込み上げてきた。多くのガーナの歴史を学び、また実際に肌で感じられたことはもちろん価値のある体験だと思うが、それと同様に多くの人との交流がとれたこと、これが自分の中で何よりの経験だった。

最後の振り返り際には、ガーナ大の人とともにいったが、一人一人の感想と疑問に真剣に誠実に答えてくれていたことがとても印象的だった。また、学生たちも自分の思うこと、伝え合いことを何とかそのまま伝えようとしている真剣な姿がしっかりと伝わった。

みんなにとって自分のリーダーの姿がどう映っていたかは、知る由もないが、みんなのリーダーをできてよかったと心から思っている。



引率の方と のお別れ🥲

ドバイ空港



P.S.

自分がいかにアフリカ諸国に、またガーナに凝り固まった偏見を持ち合わせていたかを今回の研修で、はっきりと自覚することができた。多くの面で日本と似ているとこ、全く異なるとこにも多く気づくことができた。少しでも参加を迷っている人がいれば、絶対に参加するべきだと思う。学生のうちに以上の体験ができることはもちろん、他にないことだし、治安や衛生の面で行くことを渋っている人がいれば、安心して欲しい。少なくとも、私たちは研修中にそのような面で困ることはなかった。もしあったとしても少しの刺激として楽しめると思う。(シャワーヘッドがないなど、)

写真集



レポート集

See Ghana from Ghana

外国語学部フランス語学科2年

渡航前、私は「経済成長を遂げる中、枯渇する天然資源に若者はどう立ち向かうのか」という問いを立てた。課題図書を通じてガーナの経済成長が天然資源に依存していること、その資源が枯渇の危機にあること、そして若年人口が国の半数以上を占めるという現状に関心を持ったためだ。私は①経済成長、②天然資源、③若者という三点に焦点を当て、現地でその答えに迫りたいと考えていた。しかし、実際に現地を訪れてみると、この問いそのものが日本という先進国の視点に偏っていたことに気づかされた。

まず経済成長について、日本ではアフリカを「成長著しい未来の市場」として捉える傾向がある。世界的にも、若年人口の多さからアフリカは「最後のフロンティア」と位置づけられている。しかしガーナの実情は異なっていた。経済成長は国際機関や先進国からの多額の負債に支えられ、成長の中心も製造業ではなくサービス業であるため雇用の大幅な拡大にはつながっていない。大学を卒業しても就職できず、Uberドライバーなどの職に就かざるを得ない若者も多い。ガーナの経済成長は国債に依存し、雇用を十分に生み出せていないというもう一つの側面を持っていた。

次に資源について、日本では「将来的な資源枯渇」が議論の中心だが、ガーナでは、すでに別の深刻な問題が存在していた。それは違法採掘（Galamsey）と国際市場への過度な依存である。違法採掘による金の流出は年間約450億ドル（約6兆7500億円）に上ると推測され、国家財政に甚大な損失を与えている。またガーナの主要輸出作物であるカカオの価格は国際市場に大きく依存しており、その不安定さが経済基盤の脆弱性を招いていた。植民地時代から続く不平等な貿易構造が今も根強く残っており、搾取の構造が形を変えて続いているとの認識が現地では広く共有されていた。

最後に若者の役割について、日本では「若者が主体的に行動して未来を切り開くべきだ」という価値観が強く、特に大学教育の場では自立心やリーダーシップが重視されている。人口減少や社会の停滞といった課題を背景に「若者こそが社会を変える原動力である」という見解が広く共有されている。一方、ガーナでは人口の半分以上を占める若者の可能性が大いに信じられているものの、「現時点では彼らに十分な権限や資源がない」と現実を捉え、まずは政府や大人たち、すなわち現在権限や資源を持つ側が責任を持って若者を支え、育てていくべきだという考え方が主流だった。こうした価値観の違いは、単なる文化の差というよりも社会構造や制度の整備状況、経済的背景、つまり突き詰めれば先進国と途上国という立場の違いも影響しているのではないだろうか。

プログラムを通じて、日本から見たガーナとガーナから見たガーナの間には、大きなギャップがあることを実感した。自らの問いが先進国的な価値観に基づいた視点であったことを痛感すると同時に「外からの視点」と「内からの視点」の違いを理解することの重要性を学んだ。グローバル化が進む今、先進国と途上国が対等なパートナーとしてともに歩むにはこうした視点のズレに気づき、対話を重ねていくことが不可欠だと考える。

「国際支援」は必要か

総合グローバル学部総合グローバル学科4年

1. 疑問を感じたきっかけ

渡航期間中に最も考えさせられた内容は、「支援は必要か」という点である。特にそう考えたきっかけはガーナ大学内で受けた経済の授業と、JICA職員の方々の話にある。経済の授業の中では一次産業から脱却することができない、などをはじめとした現在ガーナが抱えている複雑な課題がスライドに小さな文字で書ききれないほど多く記載されており、いくら若者が多いといえど平和な民主主義国家が形成されているといえど、事の深刻さは重く受け止めきれないほどであると感じた。それに対して、JICA職員の方々が話してくださったガーナにおける課題と進歩の内容では複雑に交錯する問題であったはずが、一つの課題とその解決方法といった具合に単純なものに捉えられていたように感じ、経済の授業とのギャップから少しの違和感を覚えた（JICAの方が持ち時間が短かったなど、そう感じた要因は様々あるかもしれない）。さらには街中に入ると、現地の方々がいかに自国を愛し、故郷を愛し、今の生活に満足しているかを感じさせられ、国際支援の側面から見るアフリカのイメージとかけ離れた現地の空気感に触れることができた。これらの経験から、「支援は必要か」ひいては「支援は必要とされているのか」という疑問を感じるに至った。

3. 「必要」も「必要ない」も彼ら次第

プログラム最終日にガーナ大学アフリカスタディーズの教授の方に国際支援は必要かと聞いた時に「井戸」の例え話を聞いた。それは3マイル先の川に水を汲みに行っていた女性たちに対して支援として井戸を作ったが、彼女らにとって川に水を汲みに行く間は家の不満や街のゴシップを話す重要なコミュニケーションの場であることから井戸の利用が定着しなかったといった内容だった。多くの日本人の感覚では、近場の井戸と3マイル先の川では比較する必要もなく簡単な方を選ぶだろう。私自身渡航前は、「先進国」と「途上国」という言葉を簡単に使い、二つの次元でしか想像できないことが多くあった。たとえば、ガーナには電車を移動手段に使うことが主流ではないが、電車や新幹線がないなんて可哀想だ、と考えている節があったことが挙げられる。しかし、本当に支援を行おうとする時に「電車がいないなんて可哀想」や「遠くまで水汲みに行くなんて不便だ」などといった私個人の視点は意識的に排除する必要があるのではないだろうかと感じるようになった。電車がいないことや井戸がないことは「変えるべき課題」では無いかもしれないし、「直すべき課題」で有るかもしれない、ただそれを支援する側の視点で決めてはいけないのだと思う。

2. 問題の複雑さに求められる解決策のあり方

渡航前は国際支援に対して、特段ネガティブな印象は持っていなかった。しかし実際に来てみて、現地に溢れかえっている問題は資金や技術や物を提供するだけでは解決しないことを痛感した。それは日本における社会課題が単純な解決策では通用しないことと同義である。たとえば日本の社会人の過労を減らすために労働基準法を設ければ、みんながストレスなく働くことができ問題は解決する、というわけではなく、本当に過労を減らそうとするならそれぞれの会社や部署ごとに業務が増える原因を特定してそれぞれの方法で解決する必要がある、といった次第だと思う。彼らが朝起きて何をして夜眠りにつくかという毎日の生活に入り込み、個々と対話し共感し理解することで、特定の地域において本当に必要とされているものが何か徐々にわかってくるのではないだろうか。

自分の「視点」を見つめなおすこと

総合グローバル学部総合グローバル学科2年

ガーナと聞くとカカオ生産などの第一次産業のイメージが強く、私自身ガーナに行くにあたって、ガーナはどのくらい開発が進んでいるのだろうか、日本や海外はどのように介入しているのかという興味関心を持ちながら渡航した。しかし、10日間の滞在を通して、それがいかに小さな視野でしか見ていない考えだったかに気づかされた。

そのきっかけになった1つがガーナ大学の教授による講義であった。私は上智で授業を受ける中でアフリカは急成長中であるというイメージを持っていた。また、渡航前にガーナについて調べる中で、農業が市場経済に対応してきている現状を知り、農業が多くの人の仕事であるという前提で現地の農業流通がどうなっているのかという疑問を持っていた。しかし、講義では現在のガーナでは農業で生計を立てていくことは不可能と言われ、自分の前提が覆され非常に驚いた。また、講義は終止悲観的だったことや、実際にガーナで過ごす中で首都アクラと地方のエルミナとのインフラ整備の差やインフォーマルセクターを見て、「急成長」はあくまでGDPから見た表面的な判断であり、実際は雇用不足やインフォーマルセクターの拡大などの課題があるという現実とのギャップに気づかされた。ガーナでは労働人口の3分の2がインフォーマルセクターで働いているという。教授はガーナの経済成長に対して二つの要素を提示していた。1つは輸入を縮小し輸出を拡大することである。しかし、関税規定が世界で一定であるために関税を引き上げることができないと指摘しており、改めてガーナが原料などの一次産品を安く輸出し、二次三次産品を高く輸入せざるを得ないグローバル経済の本質的な構造の課題について考えさせられた。2つ目は、農業セクターに製造技術を導入することで、農産物をただ収穫してうるだけでなくそれに付加価値をつける二次産業への拡大を目指すことである。これは、農業セクターが得られる利益が上がりかつ雇用も増やすことができる。しかし、政府は独立時に欧米諸国からうけた援助に対する負債が残っているために、産業に対して出費する意向はあまりないというような指摘もあり、いかに経済がそれ1つでは物語れないものかということを実感した。

また、私たちはプログラムの中でOsu castle、Elmina castle、Cape Coast castleの3つの城塞を訪れた。大西洋奴隷貿易の拠点であった城塞では、実際に奴隷の人々が収容されていた監獄に入ってガイドの方のお話を聞くことで没入体験的な経験をし、今回のプログラムの中でも特に実際に行かないと得られない経験だったと思う。ガイドの方が「監獄の中に奴隷はいないが、今も奴隷はなくなっていない」と言っていたのがガーナの今の現状を鋭く捉えているようで印象的だった。

さらに、人との出会いも大きな学びであった。現地の人々は自国の文化や自分自身に誇りを持ち、私たちを温かく迎えてくれた。また街中ではインフォーマルセクターの人々が楽しそうに談笑しており、幸せの形や価値観の多様性について考えさせられた。これらの経験から、多様な視点を持つことの重要性を感じるとともに、日本などの外国がガーナに介入していく意味とは何だろうかという疑問も湧いてきた。

「ガーナで感じた“豊かさ”のかたち」

総合グローバル学部総合グローバル学科3年

「人生で大切にしていることは何ですか？Life Adviceをください。」

もしそう聞かれたら、あなたはどうか答えるだろう。渡航前の私は、進路や研究テーマ、そして自分が置かれている環境について悩み続けていた。何かを「やらなければ」と焦る気持ちと、本当に自分が何を大切にしたいのかわからないもどかしさ。このプログラムを通して、それを一度見つめ直したいと思った。また、アフリカ大陸は「世界で最も鬱病が少ない地域」と言われている。物質的には決して豊かとは言えないはずなのに、なぜ彼らはあれほど明るく、前向きに生きていられるのか。何が私たちと違うのか、同じなのか、そして“人間としての幸せ”とはどこにあるのか。その答えを知りたかった。

だから現地で私は、出会った人々から彼ら自身の言葉で“Life Advice”を集めた。多くの対話を通じて返ってきた言葉はこうだった。

“Love yourself.” “Be thankful for what you have.” “Keep smiling.” “Life is only once.” “Don’t hold back.”

一見すると、どこにでもありそうな、ありきたりな言葉かもしれない。けれどその言葉の大切さを私はどこか忘れかけていたのかもしれないと気付かされた。彼らは「自分を愛し」「感謝し」「笑顔で生きる」という言葉を、理念ではなく“生き方”として体現していたと感じる。ガーナでは、それが日常の空気のように自然に存在してのではないだろうか。誰かが困っていれば当たり前に関心、助け、分け合い、笑い合う。「持つこと」ではなく「分かち合うこと」に価値を置く社会の中で、私は“豊かさ”の本質を見た気がした。豊かさとは、モノや数字ではなく、人と人とのつながり、そして心の余白の中にあるものだと思えて気づかされた。

滞在の終盤、エルミナ城を訪れたとき、ガイドの男性が静かに語った。

「奴隷制度は終わっていない。」

その言葉を聞いた瞬間、空気が一瞬止まったように感じた。かつて人々が鎖につながれ、大西洋を渡ったその場所で、“今も残る構造的な不平等”の重みを全身で感じた。ガーナの明るさや温かさの裏には、長い歴史と、それを受け止めながら前を向く姿勢、現地語で言う“Sankofa”の強さがある。それは“過去から学び未来に活かす原動力”であるのだろう。

この経験を通して、私は「理解する」ことよりも「問い続ける」ことの大切さを知った。ガーナを訪れたからといって、すべてを理解できたわけではない。むしろ、わからないことが増えた。けれどその“わからなさ”こそ、次の学びへの出発点なのだと考えている。そしていつか、ガーナで出会った人たちに胸を張って答えられるようになりたい――「私が人生で大切にしていることは、こうです」と。

この旅を通して私が得たのは、知識やデータではなく、“人のぬくもり”そのものだった。

彼らとの出会いとLife Adviceが詰まったノートは宝物だ。また、同じ時間を共にした渡航メンバーの存在も大きかった。現地での戸惑いや感動を共有し、時には支え合いながら学びを深めていけたのは、仲間がいたからこそだと思う。旅で出会ったすべての人々、そして共に歩んだメンバーに心から感謝を伝えたい。Medaase!!!

ガーナで過ごした10日間は、私にとって“豊かさ”の意味を問い直す旅だった。この経験を糧に、これからも人との関わりや学びの中で、自分自身の生き方を少しずつ形にしていきたいと思う。

伝統と生きるガーナの未来

文学部新聞学科2年

今回、私は渡航前に「伝統的首長制度はモダンセクターとして発展にどのような役割を果たすのか」という問いを立てました。実際に現地に行って驚いたのは、この制度について伺った際、教授の方々が口をそろえてマイナス面を強調していたことです。事前に『ガーナを知るための47章』を読み、伝統的首長制度にはプラス面もマイナス面もあると理解していました。しかし実際にはマイナス面の比重が大きく、私は偏った情報の読み取りから「良いものだ」と思い込み、現地の人々も同じように考えているに違いないという先入観を持って質問やインタビューをしていました。

たとえば、イリロツジで出会った北部出身の方は「後継ぎ争いが絶えない」と語り、その際にはアシャンテ王が仲介に入ることもあるそうです。直接の交流や生活上での関わりは必ずしもない一方、各民族の王は宮殿に住み、お祭りの際には首長同士が互いに協力して祭りを支えるそうです。また、JICAの活動では、首長の妻にあたる「クイーンマザー」がNGOと協力して若年妊娠を減らすための生協活動の拡散を支援したり、チーフが資金援助を行った事例も聞きました。さらにココナッツグローブで出会った方からは「私は首長を信じている」という言葉をいただき、伝統的に守られている制度だからこそ多面的な性質を持ち、今後は新しい社会の仕組みに適応していくことが求められるのだと感じました。この経験を通じて、私は「当たり前を疑うことの重要性」と「先入観で物事を見ることのリスク」に気づかされました。批判的思考を完全に身につけたとは言えませんが、その重要性を実感できたことは今後学び続けるうえで貴重な財産になると考えています。

当初の問いは「伝統的首長制度の未来」についてでしたが、最終的には「伝統と共に生きるガーナ人はどのような未来を創造・想像するのか」へと変わっていきました。これは経済的・生活的側面の両方から強く感じたものです。具体的には、露天商としておしゃべりしながら楽しそうに仲間や家族と共に働くインフォーマルセクターの人々。外部からの支援によって変化を促そうとする国際社会の力。ガーナ人でも教授や町中の入、JICAの人などガーナを構成している多様な人の視点からガーナを学び、国民自身は「生活の変化」より「安定」を望んでいるのではないかという考えが浮かんできました。こうした点を踏まえ、私は「国際社会とアフリカがどのような関係性で未来を創っていくのか」という問いに強い関心を持ちました。

異文化の中で、日本人として外部から関わる自分と、現地の人々との接触は刺激的でありながら、自分の中で整理するのが難しい日々でもありました。リフレクションの時間では、モヤモヤがさらに複雑になりつつも、同じ経験をした仲間と率直に言葉をぶつけ合うことで考えが深まりました。答えの出ない問いに直面し、インターネットで簡単に答えが得られないからこそ考え続けざるを得ない状況に置かれたことで、私は到着初日とは全く違う「ガーナの姿」を見ることができたのです。

ガーナで経験した「自分で考え、知り、理解する」という学びのプロセス

総合グローバル学部総合グローバル学科2年

「アフリカに学ぶ」そんなプログラム名に惹かれ、高校生時代から参加したいプログラムであった。高校生時代からアフリカ地域の国々について関心を持っており、「実際に渡航して自分の目で見て経験したい」という目標を持ち大学に入学し総合グローバル学部で勉強をしてきた。しかし、アフリカ地域に関する授業を受講したり、文献を読んだりしていく中では、これが本当に勉強したいことなのか、もっと違うことが知りたいという違和感の中で過ごしていた。そのため、自分自身でアフリカ地域に実際に行きたい、見たい、知りたいという気持ちが強くなっていた。

渡航前には2つの問いを持っていた。1つ目は植民地時代の影響が今日の教育に影響を残しているのか、2つ目はガーナと日本はどのようなつながりを持ち、今後どのような関係が形成されるのかである。プログラムの中では、ガーナ大学でのレクチャー、JICAの協力隊の方々のお話、奴隷貿易の拠点として使用されていた城やミュージアムなどを訪れる中で事前の学習では知ることができなかった実状や教育から派生した分野への関心を持つようになった。

特に関心を持ったのはガーナにおける雇用についてだ。ガーナ大学の教授の経済に関するレクチャーの中で、労働者の3分の2がインフォーマルセクターに就いていること、農業分野においては付加価値を国内で付けることなくそのまま国外に輸出されてしまっているという現状を学び、衝撃を受けた。今回のプログラムをサポートしていただいたアフリカ研究所で大学卒業後すぐに働いている方に農業分野は魅力的かという質問をすると、あまり魅力的ではないと答えていた。若者人口が多いガーナにおいて大学まで卒業してもその先の職に繋がるかわからず、大きな変化が起きた際に脆弱な立場に置かれるインフォーマルセクターに就く人が多いこと、農業分野において十分な価値創出ができていない状況に対して、今後政府などが取り組みを強化していくのではないかと考えた。しかし、レクチャーにおいては農業において小作農の生産性が上がらない背景には、特にガーナ北部で起きている土地問題も関連しているという説明もあった。そのため、ガーナの社会のみならずこれから先のことを考える中では、今起きていることのみではなく歴史的な背景など、知識を得ることが必要不可欠であると実感した。

今回のプログラム全体を思い返すと、自分なりの問いや事前学習を経て渡航し、考えたことやさらに知りたいことをメンバーと共有することができ、本当の意味で「自分で学ぶ」という経験ができたと感じている。さらに、同じプログラムに参加してもメンバーそれぞれで考えることや感じるものが異なり、自分1人では気が付くことができなかった視点を得ることができたのは収穫であった。今後の生活の中でも、「知りたい、見たい、学びたい」という姿勢を忘れずに行動し、アフリカ地域と繋がっていきたい。

ガーナを通して考える不平等なグローバル経済の構造

総合グローバル学部総合グローバル学科1年

到着して間もなく、蚊よけクリームを買うためにスーパーを訪れた。せっかくだから他にも現地の製品を買おうと考えたが、チョコレート以外に「ガーナ製」と明記された商品を見つけることが難しく、多くが輸入品であることに気づいた。さらに、インフォーマルセクターの物売りが多く見られる一方で、物価はそれに比して高く、日本とそれほど変わらない水準であった。訪れたのは比較的所得層の高い人々が利用するスーパーではあったが、賃金水準を考えると決して安いとは言えない。

なぜこのような状況が生じるのかを理解する手がかりとなったのが、現地で受講した経済の授業である。この授業は今回の渡航の中で一番印象に残り、聞いた後の余韻が今まで続いているような感覚がある。ガーナはカカオ・金・石油といった一次産品の輸出に大きく依存しており、原材料を輸出し、完成品を輸入するという構造が続いている。独立から60年以上が経過した現在も、植民地期に形成された不平等な経済構造の影響下にある。ガーナで過ごす中で、主食の米ですら輸入に頼っている現状を目の当たりにした。

製造・加工業を発展させようとしても、これまでの開発の過程で蓄積した負債が先進国にあり、技術や資本が不足しているため、初期投資を行うことが難しい。構造調整政策も十分な成果を上げられず、大規模なダム建設や石油の発見も、期待されたような好循環をもたらしていない。

どうすればガーナの産業を発展させられるのかと考えたが、そこにはここに書ききれないほどに複雑に絡み合う課題があり、一筋縄ではいかないことを痛感した。授業後も夜遅くまで考え続けたが、具体的な解決策を見出すことはできなかった。その背景には、単なる国の努力では覆せない、グローバル経済の構造的な不平等があった。

こうした現実直面したことで、資金援助などによる支援や開発の難しさと同時に、構造そのものを問い直す必要性を強く感じた。先進国が優位に立ち続ける国際経済の構造は容易には変わらない。なぜなら、その構造によって利益を得ている側が、変革を望まないからである。しかし、それでもなお、この不平等な構造を変えていくことは、今後の国際社会において不可欠である。そのためには、構造的背景を理解し、問い続ける姿勢が重要だと考えた。

今回の研修では、仲間と共に振り返りで考えを共有したことが大きな学びとなった。ふり返りの中で、仲間たちの思考力の高さには毎回驚かされた。多角的な視点や考えに触れ、自分の理解を深めることができた。一方で、研修を終えてもなお、疑問やモヤモヤは完全には解消されず、むしろ新たな問いが生まれた。この不完全燃焼を出発点とし、これからの大学での学びの中で、この構造的な不平等をより深く学んでいきたい。

ガーナ渡航がもたらした偏狭的視野からの脱却

国際教養学部1年

今回ガーナで過ごした9日間は、「行ってみないとわからない事がある」という真理を改めて私に教えてくれた。今日の世界、特に我々所謂先進国はアフリカの未来に大きな期待を抱いている。豊富な資源に、爆増する人口、加えて90年代の混乱期を抜け多くの国で経済・政治状況が上向いていることに、世界中が注目し、大陸はしばしば「ラスト・フロンティア」と称される。例に漏れず、渡航前の私はプログラムの中でガーナ・アフリカの輝かしい未来やそこに行き着くまでの現在の希望に満ちた過程を学ぶことを期待していた。経済は停滞し下降に向かい、高齢化は止まらず人口が減少し始め、未来への不満を抱える日本人にとって、対照的なアフリカ諸国の状況を羨望することは当然だ。緑豊かな自然の中で、伝統的な暮らしを続けているという「ステレオタイプなアフリカ」が、いかに今日正しくないかを確認するつもりであった。

ガーナでの日々はこれらの考えがいかに偏った目線からのものであったかを示してくれた。サブサハラアフリカ諸国に初めて訪れた大抵の人がその発展具合に驚くようであるが、むしろそれを期待していった私にとって、到着後の第一印象は、想像していたよりも街には発展の余地が残っていたという点だ。バスの窓から道沿いを簡単に見渡すだけでも、プラスチックごみなどのポイ捨て問題や不十分な交通網整備による渋滞問題等、いくつかの課題を感じる事ができた。

私の「日本人目線のアフリカ像」を特に変化させたのは、滞在3日目にガーナ大学の教授によって行われたガーナの現代経済についての講義である。講義では現在のガーナ経済が抱える根本的な問題点が次から次へと紹介され、それまでの講義がガーナの明るい未来に重点を置いていたこともあり、多くの学生にとって衝撃的な内容であった。一次産業による産品を安価で先進国へ輸出し、加工されたものを高価で買い戻すという経済サイクルは国家経済に悪影響を与え続けているが、それに替わる加工技術は長年定着していないという。他の教授はこの状態を「奴隷制度は未だに終わっていない」と評価していた。奴隷貿易から植民地支配、そして国家間貿易と時代は移り、動く商品は変わりながらも根底にある「搾取する欧米列強、搾取されるアフリカ」という構図に変化はもたらされていないのである。搾取する先進国側から見れば、自分たちにはない自然・人的資源を多く抱えるアフリカ諸国は確かに「ラスト・フロンティア」であるが、当事者であるアフリカ諸国は次のステップへと進むことが構造的に難しいという悲観的状况にあった。

この決して楽観視できないというアフリカの今後への捉え方は、ガーナに行き、ガーナを見て、ガーナの人の話を聞き、その国・人の目線に立ったからこそ得ることのできたものであった。日本に居続ければ私のWorld View（世界観）は浅く1つの視点に限られたものであったはずだ。

この新たな価値観の獲得は、私の学びへの意欲をとて刺激した。実際に足を運ぶことの影響を知った今、慣れしたんだ日本を出て、世界の色々な国に行き、その国・人の「見方」に触れてみたいと思う。特にアフリカについて考えを深めた今は、広いアフリカ大陸の中でガーナ以外の国がどのように未来に向かっていっているのか、この身体で是非体験したいと感じている。またアフリカに向かい、学びたいと強く思う。

私のこれまでとガーナのこれから

経済学部経済学科3年

はじめに

私が今回の研修前だった問いは、「ガーナは他の先進国と同様の発展を遂げる必要があるのか？」である。経済学を専攻するなかで、多くの国の発展を経済発展モデルを通して観察してきた私は、あくまで先進国側の理想として発展途上国の発展を考えていた。また、経済発展モデルの一部では、農業依存や一次産業依存からの脱却が重要視されるため、ガーナも同様の道を辿るべきかどうかについて関心を持っていた。しかし、現地を訪れ、実際に人々と交流することで、この問いは単純な教科書理論だけでは答えられないものであることを実感することとなった。

本論 現地での体験と学び

研修中、特に印象的だったのは以下の体験である。

ガーナ大学での経済誌レクチャー

若者人口が増えている現状で、どの産業に集中するべきか教員に質問したところ、彼からの答えは「農業」であった。事前知識として、ガーナの農業は低賃金・過酷な労働で、製品の質も落ちてきており、また、過度に安く取引される現状があると理解していた。しかし、彼は、農業部門をまず充実させることで、その後の加工技術や効率化といった次のステップの基盤を作ることが重視していた。この点に関して、私はいまだに多くの疑問を抱いている。ある意味、農業への依存をあえて続けるというわけではあるが、何か以上の課題の是正の見通しがある上での、「期待」なのか、それともせざるを得ないのかは、もっと調べる必要があると感じた。

学生・教員によるリフレクション

何度かのリフレクションを重ね、学生たちから出た問いは「何を持って発展・開発援助と言えるのか？」であった。開発援助や先進国型発展の価値を問う哲学的な議論に発展し、私自身、インフォーマルセクターの存在や文化的価値、彼らの歴史を失うリスクについて考慮せざるを得なかった。これにより、発展を単に経済的な合理的な視点で観察することの限界を理解した。

青年海外協力隊の皆さんとの交流

支援とは何かという質問に対し、彼らは各々の答えを出した。「現地が自ら続けていけるような制度づくり」「現地事情の理解」「独自ルール策定の基盤づくり」などを挙げた。一方で、その交流会の振り返りの中で、外部からの支援は、現地の価値観や生活に影響を与えうるものであり、方法によっては望ましくない結果を生む可能性もあると学んだ。もう一方で、ガーナは支援に依存している状況であることもJICAさんとの交流で再確認できたことから、決して支援がありふれていることが良いことではないことに気づくことができた。

本論 2 視点の変化

研修を通して、私は「発展」という概念に対する自分の考えが大きく変化した。以前は、あくまで経済学の観点とり、農業依存からの脱却やインフォーマルセクターの解消などを理想と考えていた。しかし、現地での観察や交流を通じて、ガーナはガーナ独自の発展を遂げる権利があり、必ずしも他国がガーナに先進国の方に無理やり嵌め込む必要はないと気付かされた。

例えば、インフォーマルセクターとしての路上販売や小規模商業は、私たちからの視点から見ると過酷で低賃金の「なくすべきもの」のように思えた。しかし、現地の人々にとってこれはこれまで続けてきた生活の一部であり、受け継がれてきた文化でもある。市場や街中で見た人々の表情は柔らかく笑顔に溢れている人も数少なくなく、先進国型の生活で見られる形式的な豊かさ以上に、日々の生活に充実感や幸福を感じているようにも伝わった（少なくとも、日本の朝のサラリーマンよりは）。この体験を通じて、「発展」の価値を外側の目線だけで判断することの危うさをようやく理解した。つまりは、外部の価値観や先進国モデルに基づいて発展を定義するのではなく、現地の社会や人々自体が何を「発展」と考え、何を必要としているかを尊重することが最重要項目であると考えている。

要約すれば、研修を投資して私がえた視点の変化は、発展は一樣でなく、単にガーナはガーナ独自の発展の未来を掴む可能性はいくらでもあるということであり、私たちがその幅を狭める権利は一切ないという理解である。

今回の研修を通して、私は自分の視点の偏りに気づき、外部からの理想だけで発展を定義することの危うさを学んだ。発展はどここの国でも一樣でなく、国ごとに異なる歴史的背景や文化、経済的状況に応じた道がある。決して、最善の道を辿る必要はないのである。今後、経済学を学ぶものとして、現地社会の主体性を尊重しながら、発展の多様な形を理解する姿勢を持ち続けたいと考えている。

ガーナでの学び—新たな関心への道

総合グローバル学部総合グローバル学科1年

私はもともと渡航する前は、『グローバル格差を生きる人々—「国際協力」のディストピア』という本から現在のガーナの経済不況や失業率の高さといった現状を学び、またニュース記事を読んだきっかけから金の違法採掘（Gallamsey）に関心を持っていました。しかし、ガーナでの9日間では、さらにその関心が深まりつつも、国際協力、またガーナの政治についてとても考えさせられました。

プログラムの前半では、特にガーナの政治状況が強く印象に残りました。ガーナ大学で政治の講義を受け、ガーナでは政権交代が4回も起きているという事実を知り、特に衝撃を受けました。日本とガーナは同じく民主主義国家でありながらも、なぜ日本では政権交代が長い間行われぬのか、日本とガーナの間でなぜこのような違いが生じるのか、という疑問が今でも強く残っています。私は現時点では、このような違いには、根本的な歴史的背景の違いがあると考えています。ガーナには植民地化から抜け出して独立し、またその後抑圧的な軍事政権の過去もあったということを講義で知り、ガーナの人々はこういった歴史的背景からより民主主義を守りたいという意識が高いのかもしれないと思いました。一方で、そういった過去の記憶が薄れた若い世代の間では軍事政権を望む人が増えているという現状や、日本とは真逆で、政治における若者の熱気が強いという現状にも強い関心を抱き、より詳しくガーナの現代の政治状況や若者の意識、日本との違いについて知りたいと思いました。

また、プログラムの後半、経済の講義やJICA事務所の訪問などをきっかけに、国際協力とはいったいどうあるべきかと考えるようになりました。経済の講義では、インフォーマルセクターの多さや若者の失業率、製造業の少なさなど、ガーナにおける複雑な経済状況について学びました。特にインフォーマルセクターについては、スキルが身につかず成長につながらない、政府のサポートがないため逆風から立ち上がることが難しいといった負の面を学んだ一方で、実際ガーナの街を見ると楽しそうに談笑しながら道端でモノを売っている人々を見ます。こうした学んだ内容と現地で見る景色のギャップから、何をどこまで国の問題としてとらえるべきなのか、と疑問に思うようになりました。またJICA事務所の訪問や協力隊の方々との交流もきっかけに、より国際協力を自分事としてとらえながら、開発・援助とは一体何かと考えるようになりました。国際協力については滞在中のリフレクションセッションでも議論が深まりましたが、自分の考えを持ちながらも色々な視点を聞けば聞くほどそれらにも納得してしまい、モヤモヤが増す一方でした。

ガーナでの9日間を通し、漠然としたアフリカへの関心が、ガーナへの関心へと大きく変化したととても感じました。Gallamseyへの関心も膨らみつつ、ガーナの政治や国際協力への在り方など、新しい分野への関心も生まれました。今後は、このプログラムで学んだこと・見たことを考えの材料として活用しながら、ガーナの政治や国際協力、Gallamseyなど、1年生のうちに自分の関心をさらに探求していき、徐々に自分の軸を作っていきたいと思っています。

2025



G h a n a
L e t ' s G o

